第2回神奈川県立県民ホール再整備基本構想策定委員会 議事録

日時：令和7年6月11日(水) 9:00~11:00

場所：神奈川県西庁舎7階 703会議室

1 開会

○事務局

- ・会議を公開とし、傍聴者2名が入室
- ・事務連絡

○稲村委員長

- ・特別委員の紹介、委員会成立の報告

2 議題

議題1 前提条件の整理について

- ・資料2に基づき、事務局より説明

○稲村委員長

ただ今の事務局から説明のあった前提条件の内容について、質問や追加してほしい分析、データなどがあれば、ご意見をいただきたい。

○笹井委員

P13「ライブ・エンタテインメント市場規模からみる需要」とあるが、私が把握している数値と異なる。ジャンルの取り方が異なるのかもしれないが、後ほど事務局と確認したい。

ここでは2022年時点で公演回数、動員数、市場規模がコロナ禍前の数値に回復していると書かれているが、実は2023年になって、ようやく市場規模がコロナ禍前の2019年を上回ったものと把握している。また、動員数に至っては2023年では2019年の数値に近いものの、まだ上回ってはいない。公演回数は、まだ回復しておらず2023年の時点でコロナ禍前の7割という認識でいる。そのため、この書きぶりだとミスリ

ードしてしまうかと思う。

もう少し補足すると、公演回数や動員数が回復していないのになぜ市場規模が戻ったかという、アリーナ規模の会場ができたことにより大規模な音楽ポップス公演が増えていることが挙げられる。収容人数が多く、チケットの価格も高く設定されることが多いので、大規模公演に引っ張られて市場規模の数値が戻っている。加えて全般にチケットの単価が上がっていることもある。

そのため、市場規模というより、文化施設を考えるには動員数がきちんと戻っているかの視点が必要。大規模なもの、人気のあるものにつられて市場規模が戻っている状況であり、はたしてコロナ禍前に戻ったのか、という視点は必要かと思う。

○稲村委員長

今のご指摘について事務局で見直ししてほしい。

また、私が気になっているのはP11の予備調査におけるニーズ分析の部分。

一段落目には「ライブ・エンタテインメント市場は成長傾向にあり」と記載があり、次の段落においては「過去10年間で美術にかかる活動人口そのものが減少している」と記述がある。大雑把に見ると舞台は上がっていて、美術は下がっているという形だが、レジャー白書の2022年の数字を見ると、2013年比で「音楽会、コンサートなど」は39%マイナス、「美術鑑賞」は42%マイナスなので、3%程度の差しかない。

「音楽会、コンサートなど」はコロナで一度凹んだが戻っている率が高い。一方で「美術鑑賞」の方はコロナからの戻りが少なかったのではと思う。項目自体は2013年からどちらも減少しているが、凹みかたが違うことにより、印象が異なるように見えているかと思う。この辺りは慎重に書いた方が良くはないか。全体的に調査の分析は精度を上げていただいた方が良く思う。

○石田委員

数字は色々なことを誘導するので、それに関しての読み取りは慎重にという意見に賛成する。この資料に関しては県の方で作成されており、参考として別添資料があると理解をしている。今のところ私から意見を申し上げる部分はないので議論を進めていただきたい。

○稲村委員長

他に追加してほしい視点やこれから検討して行く上であった方がいいものなどご意見はあるか。

一点質問だが、横浜市のまちづくりに関して、先日発表があったものや今後追加されるものは「前提条件の整理」の資料に随時加えていくのか。

○事務局

5月30日に横浜市の方で公表した山下公園通りのまちづくりビジョンの素案が意見募集中となっている。県民ホールも同じエリアにあることから各委員に参考送付させていただいた。今後この議論の中でも資料として追加していきたい。

○稲村委員長

それでは、議題1の前提条件の整理については、各種調査に関するソースをもう一度確かめて、数字を読み解く分析について精度を上げていただきたいと思う。以上を委員会の意見として提出させていただきたいがよろしいか。

○委員

異議なし。

議題2 再整備の基本方針について

- ・資料3に基づき、事務局より説明
- ・小林委員、佐藤委員の事前聴取意見について事務局より説明

<小林委員の意見>

資料3における基本方針の方向性に概ね異論はない。ただ、いくつか具体的にイメージを持ちながら抽象化した方がいいと思える点がある。

オペラ、バレエが鑑賞できる施設ということについて、これまでと同じことをやっていくことが前提ではなく、慎重に検討した方がいい。オペラをやるとしても、県民ホールでは貸館が中心だったと思うが、館の使われ方は、日替わりで公演を行うようなヨーロッパとは違う、また、近年はどの国でも新しいプロダクション制作はコストが抑えられている中で、昔のような舞台装置や舞台美術とは異なってきている。どのような設備が本当に必要なのか検討が必要。

席数や舞台の広さなど主催者目線の検討はどこでもよく行っているが、利用者目線で検討する必要がある。例えば、外国人の利用やコロナ以降の安心についても考慮し

つつ椅子周りのスペースの広さなど利用者の使い勝手を考えるなど。車椅子の席についても、ただ車椅子席を設けるのではなく、これからは自分で選んだ席に座れるようにするなどといったソフト面も考えていくことが求められてくると思う。

「9 持続可能な維持管理及び運営」が大事。環境に配慮した運営は当然で、解体から建設まで、県が率先してその方向性を明確に出した方がよく、建物それ自体がSDGsに合致しているかが重要。

長期間にわたって使い続けることを考え、未来に向かった新たなホールを提示する必要がある。空間をフレキシブルに使えるものなどを考えていくことや、劇場が全ての機材等を揃えるのではなく、持込みを想定するなどコスト面でも配慮できることはある。プロの方が求めているものを全て反映するのも良いが、環境が芸術を生むこともある。例えば、パリの劇場の例で、柱を上手く使うことで新しい芸術が生まれたという例もある。踏襲すべきことは、最初に県民ホールを作ったときの精神であり、その精神を今の時代にどのように表現するのか、ということを示した方がよいと思う。

県としては、県民の活動を支えるのはもちろんだが、神奈川にはプロのアーティストも多いので、その後押しをすることも含めてよいと思う。巨額の資金を入れてホールを作るので、県民に納得してもらえるかどうか重要。県民には広く文化施設として何が欲しいのか聞いても良いと思う。また、今回は笹井委員がいるので、ぴあアリーナの事例を聞きながら、県の設置すべきものを見出すといったこともよいのではないか。

<佐藤委員の意見>

ホールとギャラリーが融合し、一体となった使い方の施設として構想するのが良いのではないか。例えば美術と音楽、美術と舞台の融合など。県民ホールの名称も融合した施設という考えに沿ったものを検討しても良いかもしれない。

ホールやギャラリーのイベントに興味がない人にも来てもらうためには、広場機能が考えられる。誰もが入れるスペースを設け、その隣で芸術的な出来事が起きるような仕掛けがあると良いと思う。

県の施設としては、舞台芸術でも美術でも社会包摂的な役割が必要になると思う。人が生きていく上で必要な施設と位置付けられるようなあり方をハード面でも事業面でも考えていかなければならない。

施設の中でやることだけでなく、拠点としてアウトリーチなど施設の外に出ていく

ことも必要になる。

○稲村委員長

佐藤委員と小林委員の意見を共有していただいた。具体的な施設のイメージや機構などについても話をしていると折に触れて出てくると思うので、そういった視点もぜひ入れていきながらご意見をいただきたい。

○恵良委員

1つ目は県民への寄与や貢献の視点。首都圏ないし湾岸エリアの中でこのホールがどういうポジショニングを取るか、東京との関係、マーケットとの関係。また県の中で偏った位置にあるので、県域全体でどういうポジションを取るか、それから横浜都心臨海部の中でどういうポジションを取るか。競争関係や協同関係がある。もうひとつは、音楽業界、パフォーミングアーツ業界の中でどういうポジションを取っていくべきなのかポジションの問題がある。

次に県民のどのような期待を担って、どう活動していくのかという視点。また具体化する際には全部を満足させることはできないので、どこかで整理をしなければならない。このホールはどのようなリーディングターゲットを想定しているか。リーディングターゲットが15~20%あればその後の大きなマスを動かすことができるので、そこをイメージしていくとホールのレベルの問題と裾野の問題が解けてくる。

また時代の変化に対応すること。これから脱炭素社会や生成AI、あるいはICTやEDI、共生社会。これをどこかで解かないとならない。これが施設コンセプトの構成に大きな影響を与える。

2つ目は周辺のまちづくりの状況。横浜市からもビジョン案が出たが、この県民ホールと向かい側の産業貿易センターは、ほぼ同時期に計画され行政指導が入りツイン広場をつくっている。このツイン広場は継承されていくのか、新しく生まれ変わるのか。そこをどう解くかというまちづくりのルール上の問題がある。

それから街区、都市の緑の軸が大通り公園から旧市庁舎のエリアを超えて、横浜スタジアムで曲がり、日本大通りから直進をして大棧橋の直前で曲がり、山下公園通りを緑の都市軸に加えるということになっている。その緑の都市軸をどう捉えるか。つまり県民ホールのある山下公園通りに対して、どういう関係性をもつか、あるいは山下公園とどうシームレスな関係をもって港の景観までつなげるか。こういうことがマスタープラン、市の計画では入っている。

同時にまた裏通りの水町通りについて、これは近代化の際の都市の軸としてメインの通りに水町通りがあったという歴史がある中で、横浜市のビジョンでも水町通りの位置付けを明確に書いている。すると、バック動線に徹する訳にはいかなくなる。そういうことを考えた時に敷地内のサイトプラン、どこにホールをつくりどこに広場をつくるか。全体を並行して考えないと横浜市との整合性がとれなくなるかもしれない。逆に横浜市を味方につけていかないとスムーズにいかないと思う。

もう一点は都心臨海部を考え、県民ホールが街にどういう効果をもたらすか。まちづくりの効果を固めておくことで周辺の地元の方や横浜市民の方にも理解されやすく支持を得やすくなる。また結果的にまちの文化や暮らし、経済、ブランドにどう寄与するか。そういった視点も必要。

それから3つ目として都心臨海部の中で、音楽・パフォーミングアーツを軸として、横浜・神奈川県が一緒になったエリアのブランドに、ホールとしてどんな効果を出すかという視点が必要。特に今の人口減少を考えると、これからの時代をリードする子どもたちや若者たちの可能性を開く要素をどのくらい入れられるかが必要になる。横浜市では最近福祉のまちづくり条例が改正され、今ガイドラインの作成を行っている。それが与条件として入ってくるので先読みした方がよい。

また、にぎわいスポーツ文化局で文化ビジョンの素案を発表したので、そのキーワードを上手に取り込んだ方がよいと思う。県民ホールはそれらと整合する、あるいは先鞭をつけることになると思うので、まちづくりの整理をしっかりといただくことが重要かと思う。

あと必要なことは創造機能と人材育成。どう具体的に考えるか、多分ネットワークが有効になる。交流機能では、この場所の価値を最大限に活かすことにより人が集まってくるので、目の前を通る人をどうこのホールが掴むかという視点を持つ必要がある。それが文化のポジションを作るのではないか。また情報発信が非常に重要。それがどういったことかは先の議論になると思うが、念頭に置いておくことが必要かと思う。

○稲村委員長

県民ホールとしてのポジションづくりは重要な視点かと思う。基本方針に関わることもお話しいただいたのと同時に前提条件の書き込みについても示唆をいただいたので、順を追いながら事務局に加えていただければと思う。

○吉野委員

文化政策事業の方向性について、最終的な基本構想にどのように入るのかを質問したい。恵良委員からもあったようにどういうポジションなのかということや、あるいは前回に小林委員がどのような課題を解決するかとおっしゃった。資料3にて提示いただいているものはどれも公共劇場としては満たすべきものだと思います、何が軸なのか、濃淡のようなものが出せるのかをお伺いしたい。

これを見ると21世紀の公共劇場が備えるべき、ある種前提的な内容と、優先度がかならずしも高くない努力目標的なことと、県民ホールがあるポジションを得るため、特色を出すために重要なことが等価に扱われていると思う。プレゼンテーションの仕方として、我々のこの委員会で話し合われたことがよりふれずに出るようなまとめ方を想定いただけるかを質問させていただきたい。

○事務局

色々なレベル感のものが等列に並んでいるが、どれも同じ扱いではないと認識している。この資料はご議論をいただくための要素として出させていただいた叩き台なので、委員会の中で「県民ホールとして第一はこれ」というのであれば、目的として入ってくるかと思う。またそれを実現するためのものが二次的な目標として出るなど、今後濃淡を出すなどの書き振りは想定されると思っている。

○稲村委員長

今は要点が抽出されているので、この委員会で意見を肉付けしながらブラッシュアップして形になっていくイメージだと思う。具体的なお意見や、ここは必要だということをお話し合いながら、皆さんで加え、どこが重要かの整理ができればと思う。

○吉野委員

特色を出すための目標をどう定めるかが重要だと思うが、この中だと「4創造発信」と「7職能の確立、専門人材の育成」はある程度の規模の劇場でないと難しいことだと思う。県民ホールという、ある程度スケールが出せる劇場だからこそできることを考えるのがよいのではないか。

「7専門人材」の育成には芸術家や舞台監督や照明などの技術者の育成はもちろんあると思うが、プロデューサーや制作やドラマトウルクなどの職能の広がりを委員会でも把握していただけるとよいと思う。舞台を直接創っている人以外にも、必要な専門的な人材は多岐にわたるし、私も現場で色々な方と話す中で、そういう人の若手がないと多く聞く。職能の広がりを把握した上で方向性に反映させていただければと

思う。

○石田委員

資料3がどう集約されていくのかが非常に重要。これは論文を書く際の目次や章立てにあたる。さらに色々なことを議論していく中で最終的に集約されていく重要なプロットになると認識している。これから色々なご意見を引き出すために360度様々なことが書き込まれている現況だと思う。

皆さんの意見を頂戴しつつ、上位概念にもあたる神奈川県文化芸術振興条例、神奈川文化芸術振興計画は念頭に置く必要がある。これには県としてどのように文化政策を進めていくのかが言語化されている。全部同じ方向で検討する必要はないにせよ、その中で県民ホールがどう位置づくるのかは議論する必要がある。

今1～9まで基本方針が定められているが、これは県の方で今回のために立てられ、それに基づき右側が書かれているという認識でよいのか。

○事務局

先ほど挙げられていた条例や計画、前提の状況などを見た中で、県としてこういうことが考えられるという点で9つ挙げている。右側については具体的な例として挙げている。

○石田委員

1～9までは、「誰が」という主語が色々になっている。創造する側なのか県民なのかあるいは働く人なのか、ホールそのものなのか、付随する情報なのか。これを整理するには、色々な意見が出る中で、ボトムアップで県に対して文化政策の提案をしていくような気概を持ってこの委員会が進んでいけばよいと思っている。例えば県の文化振興のキーワードをこの中から読み取り、あるいはこれは必要だということを含め、キーワードを捉えながら議論を進めていきたいと考えている。

例えば1に「全ての人々」とあるが、それは受ける側の人たちだと思う。2は優れた芸術を鑑賞する鑑賞者、3の県民は発表する側、4は今日も上野委員や榊原委員がいらしているが、県の財産とも言えるようなアーティストの方々やそれを担う組織の方々の立場からも非常に重要。5は交流と書いてあるが、「交流」という言葉でよいのかどうか、県内の団体との交流もあるだろうし、国内、国外もある。交流のゲートウェイとすることも必要だと思う。6は情報、7は働く人、8は作品、神奈川県の価値、9はサステナビリティということで、色々なことが別の主語で書かれ並列され

ているので、様々な意見が出てくると認識している。こういったことを念頭に置きながら議論を進められればよいと思う。

○稲村委員長

条例や振興計画は審議会があると思うのでどこまで関わっていけるかもあるが、適宜議論をしながら共有できることがあればお願いしたい。県民ホールの県の文化政策の中での位置付けは常に意識しないとにならない。

○榊原委員

石田委員がおっしゃったことは皆さん思っているだろう。9つの基本方針をどのようにカテゴライズしていくかが、この後文字に残していく方向性でも重要だと思っている。

私は、現在神奈川フィルハーモニー管弦楽団の音楽主幹という立場でオーケストラを見ているが、その前はプロデュースと指揮をし、オペラやバレエ、コンサートと海外も含め日本全国でホールと協働しながら作品を創造してきた。それぞれの地域で様々な問題があった。芸術と大衆をどう位置付けて捉えていくかをきちんと見定めて、ハード、運営というものを作っているところは上手くいっていると思っている。

膨大な資料の中で、神奈川県におけるその他の地域のホールのことが何も書かれていないが、この5年間でも小田原三の丸ホールやひらしん平塚文化芸術ホールができ、藤沢市民会館も建替えの準備を進めている。10年前に広げれば県央でも大きなものができ、また横浜市18区の中でも区の施設として300~400席規模の素晴らしいものが駅から近くのところできている。

それらの地域と県民ホールを一緒に考えることが相応しいか分からないが、利用者の方々は、その運営主体が県なのか市なのか民間なのかはさておき、利便性の良さや自分たちの活動に合っているかを考える。県立のホールとしての特異性はありながらも、利用者目線で見られることを資料としても出して行かねばならないのではないかな。

またカテゴライズの話だが、5つのカテゴリーに分かれた芸術・芸能の定義があったが、芸術文化というものを表現する舞台の目的をどこに置くか。ここにお集まりの方は様々な専門分野の方や日常的にエンタテインメントから芸術を含め関わっている方々であり、自分の立場だけでもものを言う人はいないと思う。県民ホールに相応しい基準がどこにあるのかを、カテゴライズをきちんとした上で、また地域というのは世界なのか国なのか県なのか市なのかということも含め、相応しい内容や希望を右の

方に入れて行かねば、政策の方向性が増えるだけではないかと思う。

また普段からオーケストラとして様々な活動をしている組織として申し上げると、基本的に1人でも多くの人に開かれた劇場であるべきだと思っている。最終的には神奈川県として相応しい劇場にできることが素晴らしいことだと思っている。

○稲村委員長

非常に重要な視点をいただいた。方向性・方針の話をしているが、県民ホールにふさわしい理念ということも非常に重要だと思うので、合わせて議論していきたい。

○上野委員

私は長年ダンサーとして、色々な劇場でバレエ団、ダンサーと踊ってきた。私をこのように委員として選んでいただいたので、ダンサーの立場としてお話しさせていただきたい。

夢を思い描く劇場が一人ひとりあると思う。私はパリオペラ座のダンサーやカンパニーの方と親しくしているが、劇場とかバレエ団を含めたパリのあの場所のことを皆さんが共通して使う言葉で、「メゾン」と呼んでいる。

メゾンというのは英語でいうとホームとハウスが合わさったような意味合いがある。建物であり家族であり原点であり支えである、という強いワードだと感銘を受けた。では、私たちが日本でダンサーとして長年活動していてメゾンと言える場所があるか。スタジオで稽古して公演がある時は劇場に移動してなど場所は変わる。バレエ団はファミリーであり家族だが、劇場がメゾンかという稽古をするスタジオは別になっている。日本でのバレエの位置づけもあると思うが、新国立劇場はその場で全部しているので感覚的には近いのかもしれない。「メゾン」という言葉は長年根付いた深みのある言葉だと思った。

県民ホールは規模が大きく素敵な劇場で、私も何度も踊らせていただいた。規模や予算の意味でも可能性を見ていくというお話だったので夢のようなものを言わせていただくと、舞台が広く3,000席くらいのキャパシティがある劇場が夢だが、お客様と直接空気感を分かち合って、触れるかのような感覚に陥るのが感動的な空間を作ると思う。今までの県民ホールやNHKホールのワイドな感じよりも、筒形空間を持つ劇場がよい。例を挙げると東京文化会館やパリオペラ座のガルニエのように筒形で縦に大きいことで距離が近くなる、空気が近くなる、より密接になる空間が夢の空間かと思う。デザイン的にも立体的な感じがあり、小林委員よりパリの柱の話もあったが、立

体感があることで音楽や芸術世界が深くなるような劇場が新しくできたら夢だと思う。

設備では稽古場について、多くはリハーサル室が1つ2つしかない劇場が多い。私たちダンサーは常に色々なリハーサルをして過ごしているので、3つ以上は欲しいなどの理想があったり、楽屋もたくさんあるとよい。また、常に劇場で踊っているダンサーは練習しながら本番が行われており、常に劇場空間と練習している現場空間がコネクトしている状況が保たれている。それが一体感や連帯感や心の強さに繋がっている、そういうコネクトした空間が欲しい。また、基本方針4にある県民ホールが自ら優れた文化芸術作品を創作できる人材の育成と確保など、新国立劇場はすでに行っているが、団体が所属できるような、そこに根付いた団体や教育のシステムなど、それが横浜にもあったらカッコいいし、県のアピールにも、他の都道府県にはない特性にも繋がるのではないかと思う。

○稲村委員長

夢とイメージは膨らむと一気に議論が加速すると思った。「メゾン」というキーワードや、「根付く」「コネクト」など、相応しい基準、理念を考える時のキーワードを拾いながら議論していきたい。

○宮崎委員

以前に他の自治体が新しい施設を計画しているときに呼ばれ、「新しい劇場ができる」とワクワクする十個のことがあります」というスピーチを行った。その時に「建物自体にみんなワクワクしますよ」ということを言った記憶があり、ぜひ新しい県民ホールも建物自体に誰もがワクワクすることがあるといいと思った。

全体として運営する立場からすると、この資料をそのまま渡されて運営を、と言われても大変だろうなと思いながら聞いていた。

県民ホールには一体何があるのか。例えば、「施設がある、だからこれができる」、あるいは「こういうことをやりたいからこういう施設が無ければならない」という考え方もできる。劇場法でいう「人的体制」があれば、ホールや稽古場とは別に「こういう人がいるからこそ、これができる」、あるいは「こういうことを担わせたいからこういう人を置くべき」という議論にもなっていくと思う。

また他の委員からもあったが、何処にあるのかという視点から「何をさせたいのか」「何をすべきなのか」という話にもなる。この資料3にある要素は噛み砕いて、

マトリクスとまでは言わずとも分けていくと見えてくることがあるかと思った。

また先ほど地域の話もあったが、県の施設であることを考えると、半径 50m、500m、5 km、50km、500km、5,000km のどういう人々と関わっていくことになるかを頭の中で整理すると輪郭が見えてくるかと思った。

神奈川県内には県民ホール以外にも県や市、民間の色々な施設や施策があるだろう。ここに書いてあることでも、既に強力に担っているところがあるのであれば、思い切ってここからは省くなどそういう議論ができればよいと思う。

例えば人材育成では、県内には芸術関係の大学もあるし、市の施設で行っている育成もある。そういったことを踏まえていくと議論が細かいところまで入っていけるのではないか。

その上で資料 3 に列挙されていることは、いわゆる創造、鑑賞、育成、共生など、文化政策でこれまで議論され定着してきた要素を網羅しているので、ある種教科書的に全部書いている。せっかく神奈川県がこれから新しく施設をつくるとなると、今後 30 年や 50 年という長いスパンで新しい可能性を開く、備えるという視点があってもよいかと思う

アートを単なる創造や鑑賞の対象ではなく、人と人を繋ぐようなものとして発想したり、コミュニケーションの場にするなど、施設を面白がってくれる人、楽しもうとする人とどういう関係をとるのか。むしろ人材を育成するのではなくそういう人達に施設を育ててもらおうなど、違う感覚の視点を盛り込むと、文化芸術による市民社会の豊かな基盤形成などといった視点に面白いものが追加できるかと思う

建物ではよく「将来対応で残してある」などの言い方をすることがあるが、県民ホールの事業も 10 年後にどうなっているか分からないので、将来対応の事業があってもよいかと思う。

また 9 に運営の視点が入っているが、運営を担う人材やそれを支える組織のあり方についての視点も入っているとよいと思う。

誰もが安心して関われる場所を目指すということであれば、運営する人々自身がそういうことを理解して、日々の実践ができること。特に文化芸術分野でも労働環境や持続可能な働き方、ハラスメントなども大きな関心事項でもあるし、そういうことがクリアになっていること自体が施設の継続的な運営や機能や質に直結するのではないか。

また、劇場では事故やトラブル、クレームが日常的に発生する。それらにしっかり対応できる能力や、あるいは組織のリーダーがきちんというような運営ができる仕組みを一緒に考えていかないと、施設がやることやあったらいいことだけを議論してもなかなか上手くはいかない。そういう視点を盛り込んだ上で計画づくりをしていくのがこの施設のためになるかと思う。

○雲龍委員

今まで色々とお話しを伺って率直に思ったことからお伝えすると、県民ホールの性格上、公共ホールなので多目的ホールかとは思いますが、一方でソフトとして何を上演するのか、からの発想も必要ではないかと思っている。

先ほど榊原委員もおっしゃっていたが、文化芸術基本法における文化芸術の範囲は芸術や芸能、伝統芸術や娯楽までである。その中で県民ホールは何をやるのかを突き詰めて考えると、個人的にはアンケートや利用実績から考えると、語弊があるなら申し訳ないが、大ホールはクラシックやポップス、バレエやオペラではないかと勝手ながら思っている。そうなのであれば、上野委員のおっしゃっていたメゾンと言える場所になる使い方ができるホールであるとよいと思う。

そうすると、通常の公共ホールは借りられるのが5日間や一週間など限られているのが一般的なので、目的を絞って長く借りることができない。使い方の観点からも、どこまで融通が利かせられるのかにも踏み込まねばならないし、自主事業で人材育成をするのであれば、さらに時間も必要となる。

一方で過去の県民ホールの使い方を見ると、非常に稼働率が高く、ポップスのコンサートなどにも使われているので、そうしたニーズも満たさねばならない。そうなると考え方の一つとして、これだけ稼働率の高いホールで、一か月ほど自主事業でホールを使うことがはたして県民のためになるのか、という発想もある。それよりも共催事業を増やしたり、共同出資するなりで県民の皆さんが楽しんでいただける、納得できる舞台やコンサートをプログラムする方が県民のためになる、という考え方もある。その辺りを整理できたらいいと思う。

○稲村委員長

全体的な話が出されているので、ソフトから考えるべきなど、どこから深めていいのかも私自身迷うところがある。そのあたりを加味しながら考えていきたい。

○泉委員

障がい者の人数は健常者に比べると少ない。県だけではなくもっと全国的なものとして捉えていただきたいのだが、障がい者が集まれる場所はまだ少なく、踊る場所を確保することもなかなか難しいので、健常者と障がい者が一緒にできる何かを劇場でやっていけたらいいと思う。

たとえばイギリスなどでは障がいを持ちながら稼いでいるダンサーもたくさんいる。そのような外国の人を呼んで活動を見てもらったり、障がい者と一緒に教えらる指導者を海外からもっと呼べるとよい。森下スタジオでも行っていたがイギリスのアダム・ベンジャミンさんという方に来ていただきワークショップをしたりなど、そういうことができる場所が欲しい。

また障がい者は移動が大変なので、可能であれば近くに簡易宿泊ができる施設が付随してあると嬉しい。

○稲村委員長

集まる場所が少ないということ、それから外国の指導者という視点をいただいた。

私はアーティストインレジデンスという分野を専門に20年ほど研究しているが、最近の若いアーティストは宿泊して滞在するだけでなく、その稽古場で作品創りをするだけでも、レジデンスとしてそこに帰属しているようなイメージで使ったりする方もいる。そういうキーワードもあると思う。

○金田委員

榊原委員がおっしゃっていたとおり、借りる人の立場で考えると県が建てた市が建てたなどはあまり考えず、キャパシティやそこでできる内容からしか考えない。

私は文化芸術を行うわけではないが、プライベートでバスケットボールチームを組んでいる。横浜市の施設を借りるが、バスケットができる空間があるか、収容できる人数、料金、借りられる条件を満たしているかなどしか考えない。一般県民としてはそこがメインになってくるのかと思う。

○長門委員

今回の県民ホールの建替えは、神奈川県という場所柄、発信性の高いところでもあらし、今後の文化発信の拠点になる大きな機会なのではと思う。

美術系でいうと神奈川県下にはいくつもの美術館や芸術活動をする場があり、近隣に横浜美術館もある。そういった県下や近隣の美術館の役割を整理した上ではと思う

が、やはりホールとギャラリーが一緒であることの利点をもっと引き出していくことが大事。

ホールは上演される時間に行く場所だが、ギャラリーは長い時間空いているため、誰でも立ち寄れる場所であり開かれた場所として機能する。

また、神奈川県立近代美術館との差を考えても、当館はコレクションを持ち、既に制作されたものを展示している。一方でギャラリーは、これからの人たちを育てる場、想像を満たす場として、プロの方や子ども達、将来のプロかもしれない人が夢を持って創造できる場所であり、そういう将来を担っていく人々を支える発信の場であってほしいと思う。そのためにどうするのかを考えていく必要がある。

そして文化芸術は消費されるものでなく、根付いていくものであるという考えをしっかり持つということが大事。それを考えたときに何ができるか。例えばプロの作品を目にすることにより子どもたちも刺激を受けると思う。そこで子どもが同じ場に立てることや作品が展示される機会があるという可能性を夢見られるような場所があれば素敵なことかと思っている。

そのためには、ギャラリーは市民の皆さんが使う機会がある、でも市民だけが使う場所ではなくプロも使う場所であり、すごいところに自分の作品が展示されるというのがよいと思う。子どものため、素人のためというだけでなく、開かれた空間、場ができていくとよいかと思う。

あとは、持続する組織体制について。人材を育成していく上で、どのように根付くかという組織の持続化も重要。それが蓄積され、きちんと育っていくことが大事。

○稲村委員長

ギャラリーについての議論は少なくなりがちだが、盛り込んでいきたい。

○石田委員

先ほど発言したことは、どうやって議論を進めたらいいかという整理の方向性だったので私なりに夢を語らせていただければと思う。

先ほどからお話に出ている他ホールの名前を聞いていて、県民ホールのあの場所であれば実現できないことがあるのではと思う。宮崎委員がおっしゃったような、このホールにいく行為がワクワクするという場が理想的。

山下公園や日本大通りの人をもっと惹きつける場、また地下鉄で渋谷から埼玉まで

繋がっているのです、どんどん人が訪れたいと思う夢のある場になれる地の利がある場所だと思う。

例えば他の劇場では、そこでやっていることは魅力的だが周りの環境はあまり感心しない場合もある。新しい県民ホールは上手くつくれるのではないか。

基本方針の一番目、「全ての人々が」ということが実現しやすい場所だ。

それに加えて上野委員がおっしゃった「メゾン」という場になっていけば素晴らしいホールが実現すると思う。

また神奈川県にはK A A T 神奈川芸術劇場や神奈川県立音楽堂などの県立施設があるので、それらとの役割分担もある。

例えば新国立劇場と東京文化会館と県民ホールとで、首都圏の舞台芸術のトライアングルとなり、舞台芸術創造に関して世界の中でも好循環が生まれるような存在になっていければよいと思う。

○恵良委員

横浜市文化芸術創造都市施策に関わっている視点で、一つは今回の場合アジアのマーケットをどれくらい意識するかが重要。また、横浜市域では1,000人を超えるアーティストが集まっていて、それを支援する組織もある。そうするとアートのエコシステムみたいな考え方をした方がよい。色々な人がいる中にある主体が投げ込まれ、その人がある思いや目標を持ったときにその人なりのエコシステムができる。例えば「世界的なアーティストになりたい」「地域社会を変えたい」など、目標によって変わってくるが、そういう場所であるというのもこのホールを作る魅力の背景になっていく。

例えばある音楽家やダンサーが、最初は急な坂スタジオで勉強するかもしれない。ST スポットという小さな小屋かもしれない。すると赤レンガ倉庫やK A A T 神奈川芸術劇場の活動に繋がるなどが具体的なイメージ。横浜にいと YPAM (ヨコハマダンスコレクション) というコンテンポラリーダンスのイベントに出るチャンスがあり、そこで認められたりなどが描ける。そういった土壌が既にできていることも考えていく。

また場の議論があったが、場所の価値を上手に使うことにより、場所の経済が味方と関係者を引き込む。またエコシステムがあると国内外を含め、アートビジネスの何かが生まれる。

コロナ禍の時にアーティスト支援を募集したらあっという間に1,000人ほど集まった。当初は美術系のアーティストが多いかと思ったが、音楽家が多かった。そういった方々がいっぱいいらっしゃる。このホールができることによりそれぞれが夢を描けるし、3館の連携や役割分担もあるし、県域の中の役割がある。そのゲートやシンボルとして、県民ホールが高みに立てば裾野も広がるので、全部をやるのではなくどういうポジションを取るかが改めて重要だと思う。その中で支援者が出てくるということもあるかもしれない。

○吉野委員

長門委員から美術の話もあったが、美術の一分野である建築ということが公共施設を整備する上で重要だと思う、宮崎委員からも「建物自体にみんなワクワクする」という話があったが、東京文化会館が前川國男の設計で、これから重要文化財になっていく可能性を秘めているように、これだけ大規模な事業の中で作品としての建築も残していく。みなとみらいのエリアには近代建築の重要なものがたくさんあるので、古典的なデザインをしろという意味ではなく、50年後、100年後に建築としての価値が残っていくような整備の仕方も重要だと思う。

前回に佐藤委員から「名称をどうするか」という提案があったが、きっとせんだいメディアテークのようなものが念頭にあるのではないかと考えている。せんだいメディアテークの名称は、建築コンペティションの要項作成時において、審査委員長の提案により命名された。今では世界中から建築を学ぶ人が仙台を訪れるという状況がここ20年起きていて、そういう建築そのものにワクワクすることの射程の中に、文化財のことや新しい名称・概念を作るということも含まれてもいいかと思う。建築そのものも基本方針のどこかに入ってくると嬉しいと思う。

○稲村委員長

議論をまとめさせていただくと、いくつか基本方針について細かい視点をいただいている。関連条例や振興計画、まちづくり的な視点で県民ホールをどのようにポジショニングしていくかを今後深めていきたい。

その上で、ホールとギャラリーの融合や、一緒にあるという利点をどう活かしていくかについて加えていただきたい。

広場機能や、色々な方々が集える場所、全国的に集う場所がなかなか無い状況のなか、「つどう」や「交流する」「広場」という色々な言葉があるが、そこに具体性をあてながら書き込みをしていくとよいかと思う。

そのほか具体的な夢を言っていただいたので、イメージが膨らんできたと思う。メゾンという場所の話であったり、コネクトするなどの、いくつかのキーワードがあるので、イメージを具体化していく整理ができればと思う。

また理念に関わることもあった。理念のうち強弱が必要ということも意見として出された。強弱をつけながらどの辺がポイントになりそうかを深める議論ができればと思う

また、ワクワクする場所や、30年50年といった長期的な視点のお話しもあったので、前提条件の中にも長期的な視点のデータを加えてもよいのではないかと思う。

またエコシステム的な話もあったが、循環するイメージ。ポジショニングは取るが、差別化というところだけが際立つ感じもするがそうではなく、循環の中で考えていくのも重要だと思う。

イメージを作りながら随時議論を整理し、進めていきたい。

3 閉会

○稲村委員長

以上で本日の議事は終了する。次の委員会は7月7日16時から18時を予定している。基本方針について再度議論をする予定となっており、次回も原則どおり委員会を公開としたいと思うが、よろしいか。

○委員

異議なし

○稲村委員長

それでは、これをもちまして本日の委員会を終了する。